

インタビューにおける研究関心からずれたやりとり： 役割分担を尋ねる調査から

滑 田 明 暢
(立命館大学大学院)

私からは、「インタビューにおける研究関心からずれたやりとり」というタイトルの発表をさせていただきます。今回は、家族内の仕事であったり、家事、育児、介護といったものの役割分担がどのように分担されていて、その分担がどういった形で変化していくのかというリサーチクエスチョンを持った研究の中から、「ずれたやりとりが何なのか」を探っていくという研究の発表になります。

まず、この研究の背景と目的に関わることをお話します。ふとそのインタビューを行っていたり、実践している、まさに分析を行っているときに、何か聞きたいなと思う、あるいはリサーチクエスチョンに関連のあるところを聞きたいと考えてインタビューを行っていますが、聞きたいことが聞けていない、文字起こしをしてからも、何か聞けてないなという感覚がすごく残っているという疑問符がつくような状況に直面しました。今回はそうして浮かんできた疑問に率直に向き合ってみようと思い、そのインタビューの中で何が起きていたのかを見ていく分析を始めようと思いました。

リサーチクエスチョンにかかわるところが聞けていないとなると、実施しているこの研究自体も成り立たないだろうということで、まず、ずれたやりとりというものを見て、この感覚がどのように引き起こされているのかを、今回の研究では明らかにしたいと考えています。

その方法に関しては、ずれたやりとりの場面がどのようなものであったかを精査、分析し、そのやりとりのところで何について話がされて、どういった形でその話が進んでいったのかを検討しました。もう少し具体的に言えば、

調査者と協力者の間でのやりとりのすれ違いはあったのかどうかをまず疑ってみて、あったとすれば、どのようにずれが生じていたのかというところに焦点を当てて見ていきたいと思います。

題材となるインタビューには、先ほども言いましたとおり、家族の役割分担を尋ねる質的インタビュー調査を用いました。この調査のリサーチクエスションは、どのように役割分担がされていて、その役割分担がどのように変容していくのか、それに伴ってどのような心理現象が起こるのかを見ていくことにあります。

その調査の協力者は50代、60代、定年前後のご夫婦、あるいは個人の方です。そのため、2対1といいますか、3人でインタビューを行っている場合と1対1の2人でインタビューを行っている場合があります。このインタビューで聞いている項目は、半構造化インタビューですので、誰がどのくらい各役割を担っているのかどうか、どのように役割が決められているのか、話し合いがあったのかどうか、個別の出来事はどのように感じられていたかということ聞いたインタビューになります。

先ほどから、ずれたやりとり、ずれたやりとり、と何回も繰り返している

インタビュー研究（調査と分析）を行う過程で
「聞きたいことが聞けていないのでは？」と感じる



目的：

インタビュー場面における「ずれ」たやりとりに注目し、聞きたいことが聞けていない感覚はどのように引き起こされているかを検討する。

図1 リサーチクエスションとしての研究関心からずれたやりとり

のですが、ここの研究で焦点を当てる「ずれ」というものは、こういったインタビューの場面でのリサーチクエスションに関わって、どういった変化が起きるのか、を検討していく過程でみられました。変化が起きているとすれば、何か話し合いみたいなものがあって変化するのではないかということが先行研究等から見えていましたので、話し合いはしましたか、といったように聞いていました。もちろん調査者側としては、変化するのであれば話し合いがあるのだろう、変化しているところで話し合いがあるからこそ、何か変わっていくのではないかという前提で物を聞いていくのですが、インタビューの協力者からは「いや、(話し合いを)してない」という答えが返ってきて、一度ならわかりますが、同じようなことが今までに何回か起きているということで、「あれ？」といったように疑問に感じ、そんなことはない、何も話をしていないのに何か変わることがあるのかと考え始めるようになりました。

例えば家の中で、「ちょっとこれやっといてよ」とか、「これちょっとお願い」とか、「こここういうふうにせえへん」といったような簡単なやりとりみたいなものが少なくともあるはずだろう、と考えられます。しかし、ただ「いや、してない」という答えのみが返ってきたので、これ以上話が続けられずということが起こりました。どうしたものか、ということ、そのインタビューやっている当時も思っていましたし、文字起こしをしてからもやはり、これはどういうことなんだろうという思いで研究を進めていましたので、本発表では、この「話し合いをしましたか」、「いや、してない」というところから始まる場面に注目してみます。

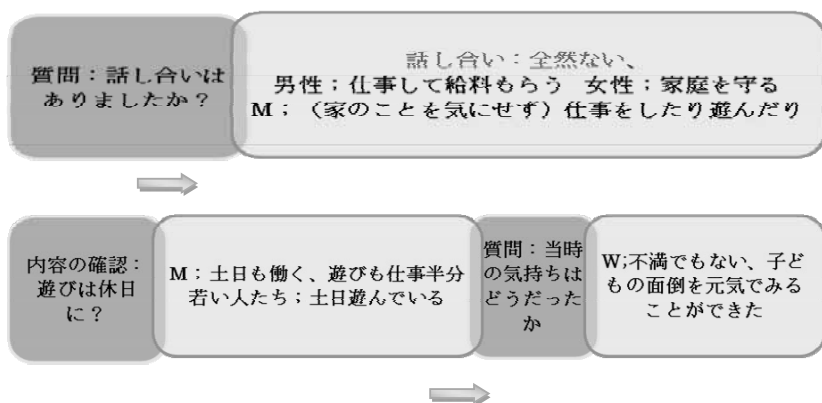
分析方法として、まずはナラティブ分析というものをういてみました。ナラティブを用いるねらいは、語りの形式であったり、話されている内容、また、それらから見える語りの構造を見ていくことにあります。本来、ナラティブ分析は、自己アイデンティティに関わって、どのようにアイデンティティが語りの中で構築されているのかを見ていくことに用いられます。基本的には自然発生的な会話、つまりインタビューのように何かねらいがあって話をしているというよりは、もっと自然に起きている話に対して用いる方法で

はありますが、ここでは何が起きてるのかということにより注目するために、こういったナラティブ分析 (e.g., Bamberg, 2010; Bamberg, Fina & Schiffrin, 2010) の方法を用いました。

具体的な分析手順は、まずテキストの場면을時空間で切り取ってストーリーを見つけるということを行いました。そして、今回は発言ごとに何が行われているのか、を検討しました。さらに、その発言の中にストーリーが存在するかどうかを見ていき、ストーリーが存在するのであれば、どういった登場人物が出てきているのかを見たり、そこから登場人物がどのように位置づけられていて、どのように振る舞っているのかを見ていくことで、どういう話がされていたのかをまず見ていきました。

次に、ではどうしてそのインタビューのやりとりの現場の中で、登場人物たちがそのように形づくられていたのかということを考えていく手順を踏み、語られたもののなかで何が起きていたのかを分析しようと思いました。

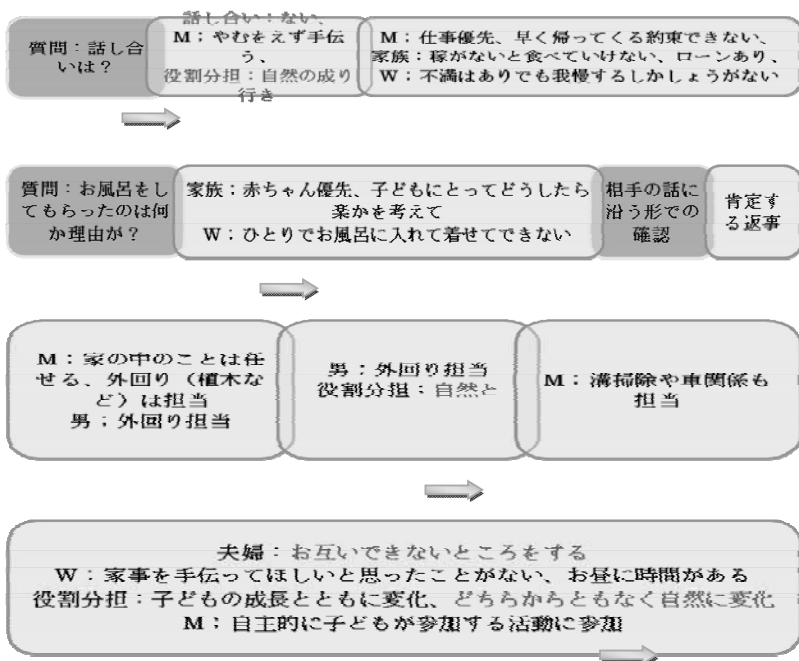
まずは1つめの事例をみていきたいと思います。今回は事例が3つあり、少し長くなるのですが、一つずつ見ていきたいと思います。まず1つ目の事例について紹介します。「話し合いはありましたか」と聞いています。すべて読んでいくと時間がかかるので、簡単に要約、まとめながら話をしていきたいと思うのですが、まず、話し合いはありましたかという話があり、その前には分担がどうなっていましたかということを聞いていて、こうなっていましたという返答があります。では、その分担を決めるときに話し合いはされましたかと聞くというやりとりの流れになっています。返事があったと思ったら、「全然ない」という答えでした。このスライドにあるやりとりのなかでは、Iと表記されているのがインタビュアーで、Mと表記されているのが男性の協力者、つまり夫の方を指します。Wと表記されているのが女性の協力者で、奥さんの方を指すことになります。話は戻って、旦那さんの方から「全然ないね」という話があり、当時は、男性というのは仕事をして給料もらって、女性というのは家庭を守るという形になっていて、自分たちはそういうふうな形になっていたの、家のことは気にせず、仕事したり遊んでいたという話になっていきます。そして、インタビュアーは、もう少し話を



語りの構図 1 事例 1 における調査者と協力者のやりとり

広げるために内容を確認しながら、「遊びは休日にされたんですか」と聞くと、今度は奥さんの方から「夫はどっちもよく働いて、遊びも仕事半分。遊びをやったとしても、休日にしてもゴルフ行くなりして仕事半分にやっていた」というふうに言われています。次に、また「その対応についてどういうふうに感じられたんですか」といったように聞いているのですが、「不満でもない、子供の面倒を元気で見る事ができた」という答えが帰ってきているのが事例 1 になります。

次に、2 つ目の事例をご紹介します。事例 2 は、3 人のお子さんがあるご家庭のご夫婦とのインタビューなのですが、3 人の子どものうち、1 人目、2 人目は、旦那さんが子育てに対して関われなかった、しかし 3 人目のときに、お風呂に入れるということだけはするようになったということがあり、ではそこに何か変化はあったのですかということを聞くために、まず「話し合いはありましたか」と聞いてみました。すると、「あんまりそんなんないよ。話とか、そのまま自然の成り行きで」、「やむを得ず手伝うことになってる」といったような答えが返ってきて、さらにその男性の方は、「そうですね。そのときは、自分というのは仕事優先であって、早く帰ってくるということは約束できないし、家族として考えても稼がな食べていけない、ローンとかもある。不満はあるけども、我慢するしかしょうがないから我慢してくれた



語りの構図2 事例2における調査者と協力者のやりとりの流れの概要

んじゃないか」というようなことを語られています。

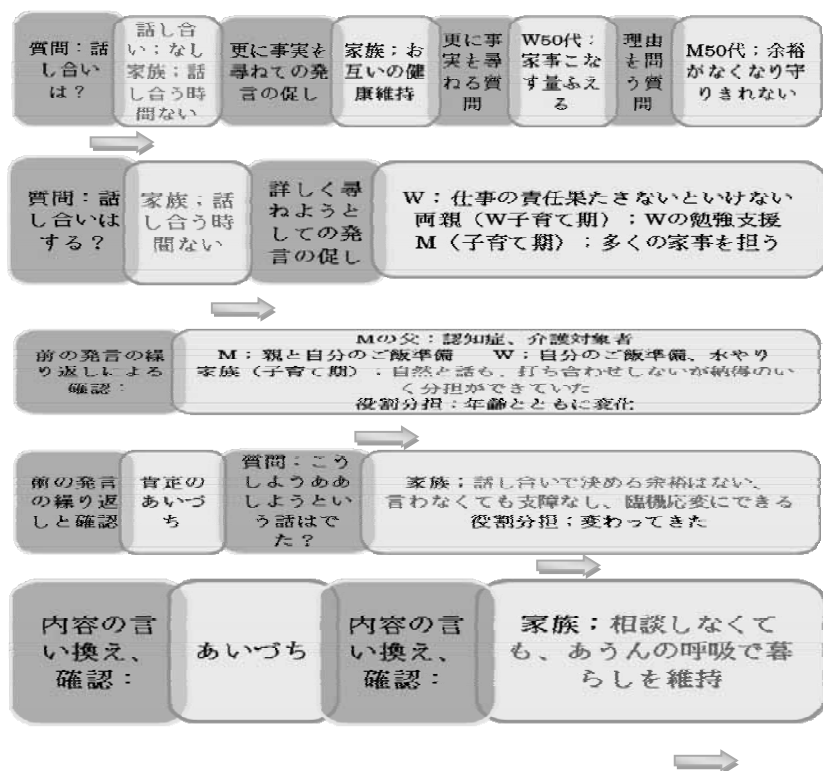
その言葉に続けて、ここでインタビュアーはもう一度、やはり何か聞けないと感じたのか、もう少し詳しい話を聞こうとして、「じゃあ、お風呂をしてもらったのは何か理由がありますか」といったように、少し問いを変えて聞き直している場面があります。そこでも、「やっぱり見るに見かねて。赤ちゃん優先であって、子どもにとってどうしたら楽かというのを考えて、そのやりとりをやっていたということで、自分は1人だったらお風呂に入れて、着せられないから、こういうことになったんだ、自然の成り行きだ」といった回答が返ってきており、それに対して調査者が相づちを打つような形でやりとりが続きます。さらにその後、ここでまた男性の方から「家の中以外の方は自分が任されていて、その周りのことは大体自分が担当していた

し、男性はその当時外回り担当だった」という発言に続いて、その後その言葉が反復されて、夫婦関係もそうだったという会話が行われ、このやりとりの中では最後に、お互いできないところをするというようなやりとりがあり、「手伝ってほしいと思ったこともない」という発言が行われたり、あと「自主的に、旦那さんの方が子どものやっтерることをお手伝いに行ったり、それは自然にというか、自分がしてとか相手がやってとかという話ではなくやっていた」といったような答えが出てきています。

最後に3つめの事例を紹介します。今回、これもまた最初にどういう分担があったのかというのを聞いてから、「では、それはどういうふうに決まったんですか、話し合いなんですか、自然になったんですか」という質問をしていたのですが、「話し合いの時間はない。子育ての時間は過ぎていきました」という答えが返ってきて、それでどんどん、もうちょっと話を聞きたいので、さらに尋ねるという発言、促しをしていました。それに対して当然返答があって、さらにまた聞こうとしているのですが、また返ってくるというやりとりがありました。それはどうしてですかといって話を続けてはいたのですが、また、やはり聞けていないと感じたんでしょうか、ここで調査者は2回目の同じ問いを行っています。今度は、「そういう話お互いにされるんですか」といった形で聞いています。「話し合う時間がないというのが実態ですね」という同じ答えが返ってきているわけですが、「うんうん、うーん」と言って、また、その話を深く聞こうとして、反復しているかのように対応すると、その中には、そのときの子育ての時期には両親が手伝ってくれていて、その当時は自分の夫の方には家事の負担はあったんだけどもという、そのときの状況のことについての語りがふえてきています。

そういったやりとりを続けていった後、またこれにかかわる話が出てきて、「今ではちょっと家族が、父の方が認知症になって、その子育て期みたいなきは自然と話、打ち合わせというわけではなくて、納得のいくような分担というのが、話し合いがなくても分担できてた」という答えが返ってきています。またそれに対してやりとりが続いていますが、「話し合いで決めるような余裕はなくて、またそれを言わなくても支障がなく、また臨機応変にで

きる」というふうにして答えが返ってきています。その後、またやりとりが続くのですが、例えば具体例が挙がってきて、「相談、例えば卵が、何も言い合いしなくて、お互いが買い物に行って卵を買ってきたと、そうなったとしてもオムライスつくったら大丈夫だということで問題がない、あうんの呼吸で暮らしを維持しています」という答えが返ってくるようなやりとりが出てきていました。



語りの構図3 事例3における調査者と協力者のやりとりの流れの概要

では、ここでもう一度、先ほどの問いの、聞けてるか、聞けてないのか、ということについて考えていきたいのですが、やりとりはどうだったのか、うまくいってなかったのかということを考えると、まず調査者は話し合い

をしましたかという質問を行って、新しい事実を聞き出すために何回か発言を繰り返して反復しています。そのあとはその発言の内容をかなり詳しく尋ねるということをしていたりしていました。協力者の方は調査者の質問に答えていました。事実であったり、当時の状況であったり、現在の状況というものを、ある種形づくりながら答えてくれているというように考えられます。赤字になっているところのように、意見や見解も述べています。そこにやりとりのすれ違いはあったのかということを考えますと、いや、調査者と協力者の間のやりとりに大きな齟齬はなかったのではないかと思います。これはコミュニケーション上といえますか、会話上で「そんな何かもう話したくないよ」といったような会話の拒絶のようなものはなく、「ちょっと聞かせてください、この辺どうですか」、「そうですね、この辺はこうです、こうです」といった質問に答えるというそのやりとり自体は、波風が立つことなく進んでいったかと思います。

それでは、何が起きていたのかということを考えますと、繰り返しにはなりますが、調査者は質問をして、協力者の対応を見ながらどんどんやりとりを繰り返したり、手がかりになる質問を行っていました。そういった質問をする調査者に対して協力者は、単純に答えをしてくれていたといったように考えられるかと思います。しかし、ただそれにしても、結局調査者としてはまだ何か聞けてないなということが確実に実感としてありましたので、この感覚はどのように引き起こされているのかということを考えたいと思います。特に3つ目の事例では、同じ質問を3回も同じインタビューのなかで聞いてたわけですので、そうすると、それについて何かもうちょっと違う答えが欲しかったのであろうといったようにとらえられるかと思います。そういったわけで、もう一度テキスト、さきほどのやりとりをじっくり見ていきますと、おそらくこういうことだったのだろうというふうにとまとめられるかと思います。

具体的には、まず調査者の問いから始まっていますので、話し合い、例えばどうですか、話し合いをしていますかという問いに対して、まず答えが返ってきて、していないという答えが返ってきます。そのときに協力者の方が

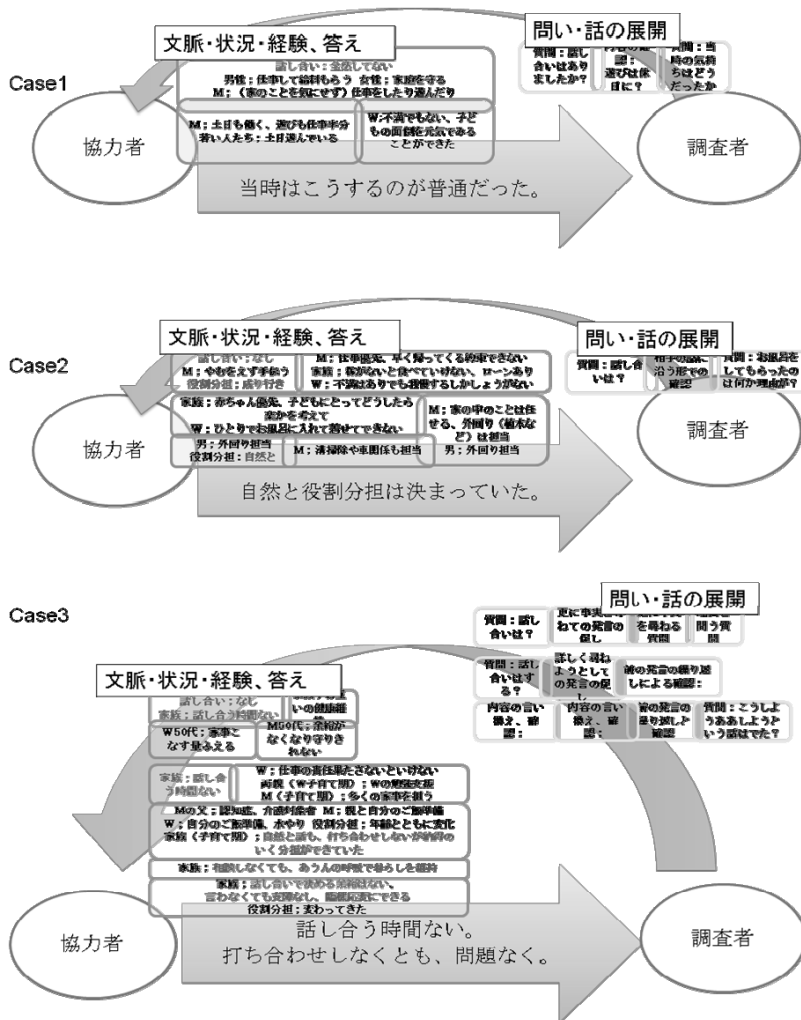


図2 事例ごとのインタビューにおけるやりとりのまとめ

何をしていたかといいますと、実際その当時の状況であったりとか、そのときはこうだったこうだったという経験を語るたびに、その経験、文脈のようなものをつくり上げて、さらに、その文脈というものはこうだったといった

ように自分たちの考え方を表現していました。それでは、どうしてその文脈をつくり上げる必要があったのかということを考えますと、これは協力者が実際調査者の問いに答えるためにその文脈をつくっていたのではないかというふうに考えました。

まず事例1の場合は、当時はこうするのが普通だった、その当時はこうでしたということをずっと答えとして使っていましたので、当時こうするのが普通だったというふうにとらえられると思います。事例2の場合は、その子どもをおふろに入れたときの変化のことを聞いていましたが、その聞いたことに対して、「いやいや、その当時はこういった時代背景や文脈があって、それで、自分たちは自然とそのときの役割分担が決まっていたんだ」ということを、この文脈をつくり上げることで伝えていました。直接表現されているところもあります。次に事例3ですが、これはまた同じようなケースがあったと思うのですが、問いに対していろいろな文脈やその当時の文脈を描くことで、話し合う時間がないということが伝えられていました。最後におっしゃっていたように、打ち合わせをしなくても問題なく済んでいるということ伝えるという形のやりとりだったのではないかといったように考えられます。そこがずれていた部分であり、そこというのはこういうところだと考えていますが、協力者の中では、話し合いというもの、話し合い以外のところがずれたといったようにここではとらえられました。こうしよう、ああしようといったお互いの考えであったり伝え合ったりということで、伝え合うことが話し合いなのですが、何か問題があって、その問題解決のために話をするのであったりということにもなります。実践していた分担といえば、当時の状況は普通であったり当然であったり、自然にどんどん変わっていくもの、自然と行われていくものであり、「特に話し合いをするほど問題は起きていない」ということがそのメッセージとして伝えられていたのかというふうに考えられます。少しくどいようですが、つまり、自然で問題がなければ話し合いはされないの、話し合いがあると不自然で問題があったということになる、ということが今回の協力者が伝えようとしていたことであったり、抱えている実際の話し合いの概念や認識だったのだと考えられます。

一方、それに対して調査者はどのようなものを話し合いと考えていたかといえますと、もっと具体的なコミュニケーションのことを想定していたと言えます。例えば、「こういうことをやっという」という発言であったり、具体的なコミュニケーションについてのことを聞いていたのが、あるいはそれを前提として考えていたのが調査者ということになります。ここで話し合いという概念がずれていたために、何かお互いが本当の現実のことをぶつけるといったようなやりとりをしていたと考えられますが、何かすれ違っている、あるいは何か違うなという感覚がインタビュアーの方に出てきていたというふうに感じています。

ここからは総合考察としてまとめていきたいと思います。調査者は質問をして話を聞き、協力者は質問に対する答えをみずからがいた状況を説明しながら答える、そういったやりとり自体はずれていなかったのではないかと、協力者はただ持っている認識を伝えてくれていただけていたのではないかと考えられます。

聞きたいことは聞けていたのか、という問いに返って考えたいと思いますが、役割分担をする中でどのようなやりとりが行われているのかというリサーチクエスションに対する答えが聞けていたかというのと、ある意味では聞けていなかったのではないかと考えられます。それはどういったことかといえますと、想定していた概念であったり認識や意味が、調査者と協力者でずれていたということになります。ただし、ここから見えてくるものは、今回こういった分析をすることで、その役割分担について、実際の当事者が持っているものや、考え方であったり認識というものが見えてきています。さらに、調査者側がその調査をする前に持っていた「こうだろう」と思っていた前提が覆る、あるいは想定していた前提がちょっと違うなという形での認識ができます。また、その当事者が持っているある種のリアリティーのようなものが見えてきたように、新たな発見であったり気づきというものがあったように思います。

このようなことを踏まえて、インタビューにおける質問設計のことを検討しますと、今回題材にしたインタビューでは、役割分担をどのようにするか

ということなどの、より日常の場面でのコミュニケーションあるいは行動については、自分の初めに思っていた聞きたいことは聞けていたのかなというふうに思います。

インタビューをすること全体に向けての提案をしますと、聞きたいことは聞いてみるといいのかなというふうにも思います。その理由として、やはり話を聞いていて全体がすれ違っていても、「あれ、おかしいな」と感じるところから、何か自分の持っていた前提と、相手の協力者の方あるいは当事者の持っているリアルな現実というものがやはり離れているかもしれない、あるいは「あれ？」と思ったところをよく見ていくと、もしかしたら、その相手の文脈のことについて深く知ることができて、何か新たな概念の発見のようなことに研究者として気づくことがあるのかなというふうに思います。

最後に、インタビューはどんなものであるのかを考えてみると、やはりその文脈といったようなものは、インタビューには含まれていると考えられま

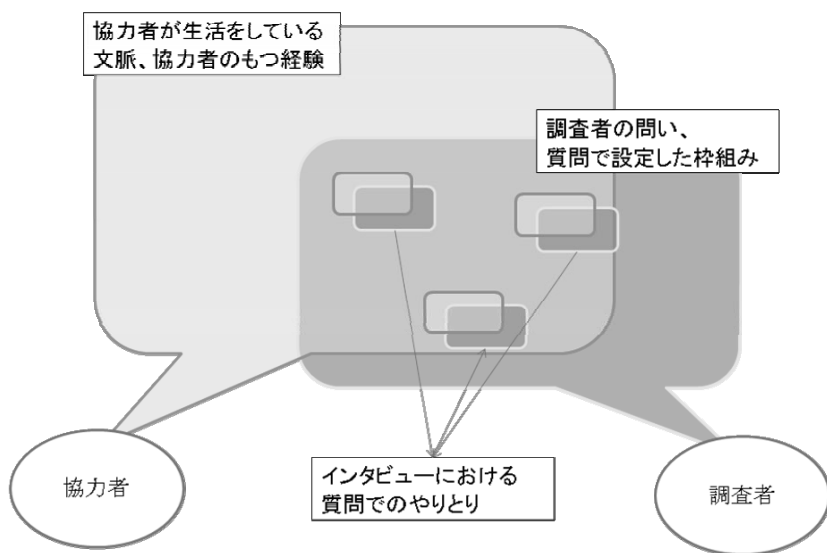


図3 インタビューにおける調査者と協力者のやりとりのイメージ構図

す。インタビュアーはその場にインタビューの場面を設定して、さらにそのインタビューの中でも、自分の質問によっていろいろと自分の聞きたいところであったり、文脈を設定しようとしています。しかし、やはりどこかずれながらのやりとりや場面がインタビューで行われているのかなというふうに、今回の分析を通して考えた次第です。

結論となりますが、インタビューは調査者と協力者との対話といえるかと思います。これは、やまだ（2007）で述べられている通りであると考えられます。また、想定した前提というものが、ある意味で、協力者が接している現実や経験の中に存在する意味というものがある程度見えてくる、そして、そういったせめぎ合いのところからお互いに言葉にしていなかったあるいは気づいていなかったようなことが生まれるということもあり得るのかなというふうに考えています。実際にこういったデータを見ることで、ある程度可視化されたのではないかというふうに考えています。

これで発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【引用文献】

- Bamberg, M, De Fina, A., & Schiffrin, D. (2010). Discursive perspectives on identity construction. In S. Schwartz, K. Luyckx & V. Vignoles (Eds.), *Handbook of identity theory and research*. Berlin/New York: Springer Verlag.
- Bamberg, M. (2010). Narrative analysis. In H. Cooper (Editor-in-chief), *APA handbook of research methods in psychology* (3 volumes). Washington, DC : APA Press.
- やまだようこ (2007). 質的研究における対話的モデル構成法：多重の現実，ナラティブ・テキスト，対話的省察性。質的心理学研究，6, 174-194.